

医療法人社団  
順仁堂 遊佐病院

# “加水タイプとろみ状流動食” 投与方法の実際とその有用性

## ～大幅な業務負担軽減を実現～

医療法人社団 順仁堂 遊佐病院では、胃瘻患者さんの流動食投与において、  
液体流動食から“加水タイプとろみ状流動食”に切り替えたことにより、  
看護の業務負担を大幅に軽減することができました。  
今回、投与に関わるスタッフの方々に“加水タイプとろみ状流動食”の投与手順や  
得られたメリット等についてお話を伺いました。



↑前列左より 信夫松子副院長(兼)総看護師長  
佐藤 卓院長  
佐藤いづみ副院長  
加賀美幸管理栄養士(給食課主任)  
後列左より 佐藤典子1病棟看護師長  
阿蘇静子2病棟看護師長  
佐藤千恵看護師

## 医療法人社団 順仁堂 遊佐病院のご紹介

当院は山形県の庄内平野の北部、日本海に沿う鳥海山の麓の遊佐町にある療養型病院です。訪問看護ステーション並びに居宅介護支援事業所を併設し、短期入所療養介護サービスも行っていきます。地域連携にも力を入れており、医療、看護、介護のトータルなサービスの提供を通じて、患者さんの全人的な治療・ケアに努めています。

看護においては、患者さん、ご家族お一人おひとりの気持ちに寄り添ったケアができることを目指し、「学ぶことのできる環境づくり」や研修受講等キャリアアップ支援に積極的に取り組んでいます。

また、当院は、平成25年度から日本看護協会・山形県看護協会事業である「ワーク・ライフ・バランスワークショップ」に参加しています。広く各世代がやりがいをもって生活や仕事が続けられる職場環境の充実に努めています。例えば、定時(日勤16:50)終業の励行、子育て支援に積極的に取り組んでおり、その成果として平成25年度の看護職員の離職者は「ゼロ」であり、山形県が推進する「山形いきいき子育て応援企業 宣言企業」に登録されました。

\*「山形いきいき応援企業」とは、「女性の活躍推進」「仕事と家庭の両立支援」に取り組む県内に活動拠点を置く企業等を登録・認定し、山形県がサポート(奨励金の交付など)する制度。

### 【施設概要】



- 所在地  
山形県飽海郡遊佐町
- 病床数  
84床(医療療養84床)
- 診療科目  
内科、小児科、外科、婦人科、リハビリテーション科、病理診断、(訪問診療)
- 病院の理念  
仁の心に順じて地域の医療・介護・福祉に力を尽くします

## 経管栄養管理の現況

当院は、84床を有する療養型病院です。入院患者さんは当院を受診されて入院される方が約8割、急性期病院、診療所等からの紹介入院が約2割です。循環器疾患、がん、脳血管疾患の患者さんが多く、急性期から亜急性期、そして慢性期医療、在宅医療まで地域で幅広い役割を担っています。

経管栄養施行患者さんは常時20名前後で、そのうち胃瘻の患者さんには、“加水タイプとろみ状流動食”を使用しています。

## “加水タイプとろみ状流動食”使用の経緯

“加水タイプとろみ状流動食”採用以前は、主に紙パックの液体流動食をイルリガートルに移し替え、栄養セットを使用して投与していました。しかし、衛生管理を向上させたいという意向から、イルリガートルや栄養セットの洗浄使用を見直すことにしました。

当初は、ソフトパックの液体流動食使用を検討しましたが、投与に栄養セットが必要なことから、普及が進みつつあった“加水タイプとろみ状流動食”に注目しました。とろみ状流動食は、自然落下投与が可能のため、栄養セットを使わずに製品を胃瘻カテーテルに直接繋ぎ、投与することができます。実際に“加水タイプとろみ状流動食”を使用したところ、イルリガートルや栄養セットの接続・洗浄の作業負担が削減され、クレンメによる投与速度の調節が不要となり、省力化を実感することができました。

また、“加水タイプとろみ状流動食”は水分が多く含まれているため、別に行っていた水分投与が省けるのであれば、さらなる業務の軽減が望めるということで使用を決定しました。

## 投与の流れ



胃瘻カテーテルの状態を観察しつつ、胃瘻接続チューブ注入口のキャップを開ける。

バルーン・ボタン型胃瘻カテーテル(20Fr、約20cm)を使用



注入ボトルで薬剤を注入。(水分50mLに混和)



投与前に製品をよく揉む、あるいはよく振る。

よりスムーズな滴下が得られます!



スパウトを開け、胃瘻接続チューブを挿入する。

容器内に空気開栓する。



## 投与の実際

患者さんの状態によって異なりますが、当院では1日3回投与が基本です。エネルギー量は、300kcalを朝、昼、夕3回(計900kcal/日)投与の場合が多くなっています。エネルギーを抑えたい時は、400kcalを朝、夕2回(計800kcal/日)投与し、昼は水分のみとする場合もあります。薬剤を投与する場合は流動食の投与前に注入ボトルを用いて投与します。

## 投与のポイント

スムーズな投与のために、製品を吊るす高さを十分にとり、できる限りチューブが真っ直ぐになるように、ひもで高さを調節しています。

投与時は患者さんの体位を30度ギャッジアップさせていますが、患者さんによっては、腹圧の上昇あるいは拘縮があることによってスムーズな滴下が得られない場合があります。その場合は、患者さんに合った体位をいろいろ試してみて、スムーズに流れる体位を見つけています。同時に、患者さんの様子をよく観察しながら投与に臨んでいます。

### スムーズな投与のポイント

- 患者さんの体位を適切にする(30度ギャッジアップ)
- 投与前に製品をよく揉む、あるいはよく振る
- スパウトを開栓する際は、容器内に空気が入るようにする
- 製品を吊るす高さを十分にとる

## “加水タイプとろみ状流動食”の有用性を実感

実際に“加水タイプとろみ状流動食”を使用することで、別途水分投与の必要がなくなり、大幅な業務負担軽減が図れました。薬剤投与時、および流動食投与終了時のチューブフラッシング時のみで、水分必要量を充足できます。

また、“加水タイプとろみ状流動食”は投与速度の調整も不要で、自然落下で投与できます。患者さんにもよりますが概ね20～30分で投与が完了し、滴下もスムーズです。そのため、投与準備の手間の軽減、投与時間の短縮というメリットも得られました。慣れれば看護スタッフの誰でも同じように安全に準備でき、投与時間もそれほど差異はありません。

## 便性状に変化が

“加水タイプとろみ状流動食”は容量が多く、短時間投与による下痢等の消化管症状がみられるのではと心配でしたが、問題なく投与することができました。本製品は、投与後胃内で粘度が高まる特長を有しているため、そうしたことも少なからず奏功しているのではないかという印象です。切り替え前は軟便、あるいは便秘ぎみであった患者さんの便の性状が切り替え後、安定するようになった例もあります。

そのため、最近では、細いチューブを使用している経鼻、腸瘻患者さんを除き、逆流や嘔吐がない胃瘻患者さんの場合は“加水タイプとろみ状流動食”を第一選択とする場合が多くなっています。



全し、  
ープと繋ぐ。

気が入るよう  
るとよい



製品を吊るして、  
ひもで高さを調節する。



チューブが  
真っすぐに、  
なるように  
調整する。



20～30分で投与終了。  
終了後、注入ボトルを  
用いてフラッシング  
(水分50mL)を行う。

遊佐病院における

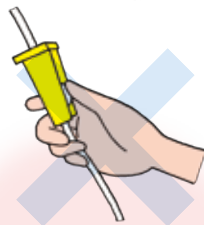
# “加水タイプとろみ状流動食”のメリット

## 【紙パック液体流動食との比較】



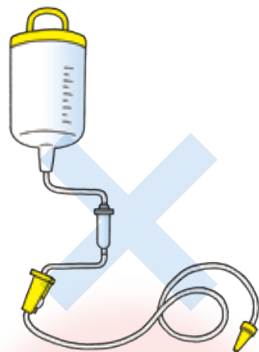
point 1

イリリガートルへの  
移し替えが不要



point 2

投与速度の  
調節が不要



point 3

栄養セットが不要

投与準備の作業負担が軽減  
汚染リスクも減少

point 4

投与時間は概ね  
20~30分で終了

他の業務に時間を  
充てることができる

point 5

加水タイプのため  
別途水分投与が不要

※フラッシングは実施



編集・発行

株式会社ジェフコーポレーション

〒105-0012 東京都港区芝大門1-16-3 芝大門116ビル 3F  
TEL: 03-3578-0303 WEB: <http://www.jeff.jp>